

松本清張「清張通史② 空白の世紀」

<抜粋>

(文中の太字は引用者による／・・・・・・は省略部分)

大和盆地の居住域

・・・・・・大和盆地と京都盆地とは、琵琶湖とともに断層が陥没してできた湖であった。大和盆地のばあい、ほぼ一万年前に二上山の噴出で生駒山系がやぶれ、湖水を西に流したことで盆地中央の沼沢湿地帯がうまれた。西に流出した水路がいまの大和川である。

沖積世（約一万年前から現在まで）の時代にはいると、大和盆地の周縁高地に人が住みつくようになる。

生駒・金剛山地のあいだの峡谷を西の河内へむかってはしる大和川を大和盆地にみると、まるで一本の木の幹からたくさんの枝がひろがって繁茂しているようである。その梢の先は、盆地をかこむ四方の丘陵地帯のはざまへ入りこんでいる。いうまでもなく、そこがそれぞれの水源である。

大和川という1本の幹からわかれたたくさんの枝である支流の名は、北側に生駒川・竜田川・富雄川・秋篠川・佐保川、東側に布留川、東南側に初瀬川・寺川・米川・飛鳥川、南側に曾我川・葛城川・高田川・葛下かつしも川である。四方の丘陵地帯とは、東に笠置山脈、北に佐紀丘陵、南に吉野へつづく宇陀・竜門山塊、そして西は生駒山地と金剛山脈である。

大和盆地の縄文時代後期の遺跡は、この大和川支流の枝がひろがった先端近くにそってある。ということは台地上に縄文時代の人々が住んでいたということで、この台地のふちも、標高百メートルないし百五十メートルくらいである。まん中の盆地は、湖沼あとの泥湿地帯であったから、人が住めるようなところではなかった。

弥生前期になると、盆地の水もかなり減って、台地から傾斜した土地へ、住居がおりてくるようになった。それでもまだ泥湿地帯が多く、ほうぼうに水がたまっていた。

これを要するに、大和盆地をとりまく縄文時代の遺跡は、前期では標高約百二十メートルの高地にあり、後期では標高約六十五メートルの台地上にある。ということは、盆地湖の水がだんだんに流出して水位がさがったため、それまで水の下にかくれていた山裾からの傾斜地が、水面にあらわれたのである。

縄文前期では、標高百二十メートル以上の高地が、大和盆地湖をとりまく水ぎわであり、湖岸であった。それが後期になると、標高六十五メートルまでさがった周辺が湖岸になる。

前期に人の住んだ跡がすくなく、後期に、その遺跡がふえてくるのは、湖の水が引くにつれて、人々がそれまでの高地から、低い台地の湖岸に、おりてきて住んだ、また、よそからあつまってくる人々などによって、人口もふえたからであろう。

生駒山地にしても、葛城山塊（金剛山脈）にしても、またその中間にできた火山の二上山にしても、その山裾は標高百メートルである。おそらくこの百メートルの等高線が、縄文中期の湖岸近くであったろう。

人があつまった理由の一つとして、この二上山からは、サヌカイトとよばれる紫蘇輝石しそせき安山岩（火山の溶岩）が採掘され、石鏃・石槍などの原石として、二上山麓一帯が、その加工工場となっていたことがあげられよう。ここから出た石槍などは、盆地の東側の三輪・新沢のほか、二上山西側の河内国府からも出ている。二上山のサヌカイトの原石とその加工工場跡は、昭和初期に、考古学者樋口清之によって発見された（樋口『大和竹内石器時代遺跡』昭和十一年）。

石器時代の重要な武器である石槍や石鏃の原石と、その製造工場が、二上山麓にあれば、そのころの人々は、よそからはるばると、これをもとめにくたであろう。交易がこうしてはじまる。やはり石鏃の原石である黒曜石が、長野県の八ヶ岳山麓や、神奈川県湯河原の山から出て、その加工されたものが、各地に交易されているのも、おなじことである。

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて、大和盆地湖のまわりに住む人々は、湖の魚をとったり（第四紀前半の終わりごろには、大阪湾の海水が、ここまで浸入していたといわれる）、狩りをしたり、多少の農耕をしたり、また、サヌカ

イトの採掘と加工工場に、「勤務」するものもいたであろう。

それが弥生時代にはいると、湖の水はさらに減って水位がさがり、**弥生前期の標高約六十メートルが湖岸**となり、中・後期になると、もっとさがって五十メートルくらいが、湖の岸辺となったであろう。湖水が、西の瀬戸内海（大阪湾）に流されるにつれて、山裾から中央にむかっての傾斜地が、ひろくあらわれるようになり、また上流の水勢によってはこぼれた土砂の堆積で湖底にあさいところができるようになる。

弥生前期の住居あとの唐子遺跡は、初瀬川と寺川とがはこんだ土砂のデルタにあり、この集落は五十メートルの線にある。つまり、この五十メートル線が当時大和盆地の水ぎわであった。

古墳周帯

弥生時代がおわって、古墳時代の前期（四世紀）になると、大和盆地は湖の水がほとんど西へ流れ、そのあとが大和川と、そのたくさんな支流となつてのこる。

けれども盆地の水は完全にひいたのではなく、ほうぼうに大きな沼のある状態がつづいていた。このころの岸辺は、平均して四十五メートルの線であったと思われる。飛鳥あたりはすこし高くて八十メートルで、三輪山系の西麓にあたる八十メートル線上に、乗鞍古墳・崇神陵・景行陵などがならび、大神神社や石上神官は百メートル線上にならび、いわゆる山辺の道も、この百メートル線上の南北にそっている。

こうしてみると、古墳前期から中期にかけて、人々の集落は四十五メートル線の水ぎわよりも、少し高い六十メートル線ないし七十メートル線上にあったと思われる。これは洪水などによる氾濫をさけたのであろう。七十メートル線上には三味田さみだ・柳本・纏向・箸中などがならび、ここにも古墳が（後期をふくめて）多い。箸中の箸墓（ヤマトトビモモソヒメの墓）は、前期の方円墳のなかでも古く、邪馬台国大和説による卑弥呼の墓に擬せられているのは知られているとおりである。

盆地の周辺を、標高七十メートルないし百メートルのあいだに、古墳群が帯のようにとりまいているので、これを古墳周帯とよぶこともできる。もちろん墳墓は集落の近くにいとなまれるから、集落周帯でもあるわけだ。

そうすると、大和盆地の中ほどは水たまりの多い泥湿地帯で、その面積は、盆地の三分の一くらいはあったと思われる。つまり三分の一が人の住めない沼地だった。沼のあさいところは葦草がはえ、水禽みずとり類がせいそくしていた。

「万葉集」の、舒明天皇の歌という大和の「海原うなはらは 鷗かまめ立つ立つ……」（二）の「海原」が、盆地の沼沢や湿地の形容にしては、大げさに聞こえるかもしれないが、見おろせば盆地いちめん水が光る状態が海原のようにも見えたであろう。ここにいう鷗とは、水鳥のことである。七世紀になっても大和盆地は、このようなありさまであった。

泥湿地だから、稲のうえつけにはむいたが、それも湖床が、せいぜい五十センチくらいまでである。それは沼の岸べ近いところか、唐古などのように、洲ができたところにかざられていて、まん中の大半は湖床が四、五メートルくらいの深さであった……。

<この文書は、「**生駒の神話**」（下記 URL をクリック）に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>